

青年期の肥満により成人後の心臓血管死のリスク 3 倍に

世界的に子どもの肥満が増加していることを受け、本研究では青年期の肥満指数(以下、BMI)と成人してからの心臓血管病による死亡との関連について検討した。

1967~2010年に、イスラエルの平均年齢 17.3 歳の青年男女 230 万人を対象に BMI を測定し、およそ 40 年追跡した。BMI 値により、7 つの群に分け(5 未満、5~24、25~49、50~74、75~84、85~94、95 以上の各パーセンタイル群)、心臓血管病による死亡のリスクを算出した。その結果、心臓血管病死のリスクは、BMI が 50~74 パーセンタイルの、いわゆる許容範囲とされている群から段階的に上昇した。95 パーセンタイル群では、5~24 パーセンタイル群を基準とした場合の心臓血管病死の補正後ハザード比は 3.5 であった。また、追跡期間ごとでは、95 パーセンタイル群の心臓血管病死のハザード比が 0~10 年では 2.0 であったが、30~40 年には 4.1 に増大した。

したがって、青年期の肥満や太り過ぎが成人後の心臓血管病死と強く関連することが明らかとなった。青年期の BMI が 50~74 パーセンタイルの、いわゆる「許容範囲内」と考えられている群においても、成人後の心臓血管病死リスクは増大し、95 パーセンタイル以上の群ではそのリスクは 3.5 倍になることが示された。

出典 : New England Journal of Medicine. Published online Apr 13, 2016;

doi: 10.1056/NEJMoa1503840